

パンドーラ（本邦初訳・連載2）

ヘンリー・ジェイムズ
出原博明訳

旅行中に増えたいろいろなものに囲まれてトランクに並んで腰をおろしているデイ夫妻の姿が、不意に視覚に入ってきて、こんな思いから彼は注意を逸らされた。夫妻の顔がこんなにも周囲の物事への意識をあらわしているのを、彼はそれまでに見たことがなかった。今、この謎めいたふたりには、やわらかくふくらむような感じがあって、快い気持でいるのだということが窺える。ふたりは、尋ねられたら、帰ってきたことが本当に嬉しい、と口にしたことだろう。われわれの観察者は、少し離れた埠頭の端に彼らの息子が居るのに気づいた。息子は、連絡船が通り過ぎるのを、2隻の巨船の船腹の間に見ることのできる場所に陣取っていた。連絡船は、アメリカ水域の水中に重荷で喫水を深くしており、巨きなピラミッドのようだった。息子は、垢抜けのした小さな片足をロープの輪のうえに乗せ、陸に揚げられた総てのものに背中を向け、光沢のあるカラーで囲んだ首を伸ばし、そこに立って辛抱よく何かを考えていた。彼の大きな葉巻の香が、腐敗していく堆積物の悪臭とまじり合っていた。傍らで、妹が大きな柱に抱きついて、落ちることなしに水の上にどのくらい遠くまで首を伸ばすことができるか試そうとしていた。フォーゲルシュタインの下男は検査官を探しに行っていて、そこには居なかった。オットー伯爵自身は持ち物を集めて、義務から解放されるのを待っていた。自分のような重要な地位にいる者の場合は検閲の儀式は短くて済むだろうということを少しも疑わず、当てにしていた。検閲が始まらないうちに、彼は若いデイ氏に声を掛けた。同時に、少女に向かって帽子をもち上げてみせた。それまで、この小娘には挨拶をしていなかったのだ。彼女は、埠頭の

危険な側へからだをぐるっと廻して、彼の挨拶を、躲した。確かにまだ心身が発達していない。明らかに、1枚の羽のように軽かった。

「君も同じように待たされているんだね。ほんとうにうんざりだ」とオートー伯爵は青年に言った。

青年は振り向かずに答えた。「始まりさえすれば、問題ないですよ。姉が或る方に来てくれるように頼んであるのです」

「お別れの挨拶をしたくて、デイ嬢を探したんですがね」フォーゲルシュタインは言葉を継いだ。「見付からなくて」

「会いに行ってるんでしょう。あの方は、姉の大切な友人ですから」

「きっと恋人よ！」と突然、少女が叫んだ。「ヨーロッパで手紙書きつけてたものね」

兄は、ちょっとの間、黙って葉巻をふかした。

「あれは、ただ、このことが目的だったんだよ。言いつけてやるぞ、チビ」と彼はつけ加えた。

しかし、若いデイ嬢は兄の脅しを無視した。少女は、まったく気儘なやりかたでフォーゲルシュタインにだけ話し掛けた。

「これがニューヨークよ。ユーチカよりずっといいわ」

下僕が税関吏を連れて戻ってきていたので、彼は少女に返事をしている余裕がなかった。が、背を向けながら、この子供の好みの視点からその奥地の町について思いをめぐらした。一般人の場合のような検査は彼は当然免除された。担当の税関吏は、大きな麦藁帽子をかぶりダイヤの飾りピンをつけていたが、とても世慣れた男だった。伯爵の型どおりの申告に対して、「ええっと、問題ないとおもいますよ。このまま合格ということにしようとおもいます」と言っただけだった。まるで愛撫でもするように沢山の合格のチョークの印を分配していった。下僕が幾つかの荷物の錠や留金をはずしていたのだが、無駄なことになった。下僕がそれらを改めて掛け直している間、役人はそこに突っ立って額の汗を拭きながらフォーゲルシュタインと話をしていた。「私たちの国へは初めてですか？ —— まったくのおひとりで —— つまり、

ご婦人はお連れせずに？ むろん、ぼく達がいちばん欲しいのはご婦人がた
ですからね」役人のものの言い方はこんな調子だった。他方、若い外交官は、
この男は何を待っているのだろうか、何かをこの男の掌に掴ませてやらなけ
ればならないのだろうか、と考えていた。しかし、この治安秩序の代行者が
われわれの友人をそんな不安な気持ちにさせたのは、ほんの僅かの間だった。
すぐに、伯爵の滞在が素晴らしいものになるよう願っているということを父
親のように言い残して、彼は立ち去った。青年はそれを見て、もしチップを
渡したりしたら大変な過ちをおかすことになっただろう、ということを知った。
これは単にアメリカの流儀であり、結局のところ、それはそれで垢ぬけ
している。下僕が手押荷物運搬車をもっているポーターを確保してきた。フォー
ゲルシュタインが立ち去ろうとしたとき、群衆の中からパンドーラ・デイが
とび出してきて、せんごく彼を解放してくれたあの税関吏に熱心に話し掛け
た。彼女は、開いた手紙を手にもっていて、それを彼に渡した。税関吏は、
考え深そうに髭を撫でながら手紙に目を注いだ。それから、彼女は、両親が
荷物に腰をおろしているところへ彼を連れていった。オットー伯爵は、下僕
をポーターと一緒に行かせ、自分はパンドーラの後を追った。この女性には
別れの挨拶をしたいと心から願っていたのだ。船上でふたりが最後に言い交
わしたことは、陸上で再会しようということであった。しかし、パンドーラ
が上流社会に属していないことは明らかだから、彼が彼女に会うとすれば、
それは将にこの埠頭以外ではありえないことのように思えた。フォーゲルシュ
タインのほうは、もちろん、上流社会に身を置くことになる。そして、もし
ユーチカ——この土地については、あのするどい妹の意見を耳にしていた
のだが——が自分が身を置く社会の状況よりもよくないのであれば、彼は
如何なることがあってもユーチカへは行きはしないからである。彼は、すぐ
パンドーラに追いついた。彼女が、船長を紹介したときと同じやり方で、社
会秩序の代理人を両親に引き合わせているところだった。デイ夫妻は立って
男と握手した。どうやら、ちょっとしたおしゃべりを喜んでするつもりの様
子だ。「弟と妹を紹介いたしますわ」とパンドーラが言っているのが聞こえ

た。彼女は、弟と妹を探してあたりを見回した。その視線をフォーゲルシュタインはとらえた。彼は、手を差し出して進み出た。無口で現実的だとばかり聞かされていたのに、アメリカ人たちというものはほんとうは過度なほどに社交的愛敬があるようだ、と、そのとき、彼は考えていた。彼らは、沢山のナポリっ子さながらにのりりくらしとおしゃべりに刻を過ごしていたのである。

「さようなら、フォーゲルシュタイン伯爵」とパンドーラが言った。あれやこれやで激しく活動したので彼女はいくらか紅潮している。が、だからといってそれで見栄えがわるくなっているわけではない。「素晴らしい経験をなさいますように。そうして、この国を正当に評価されますように」

「うまく切り抜けられるようにね」と彼は答えた。自分の英語が既に慣用法にかなうようになってきたと感じて微笑んでいた。

「あたしが手紙を書いたお方は病気なんです」と彼女は言った。「あまりにも間の悪いことじゃありません？ でも、お友達の検査官殿に宛てて手紙をよこしてくれましたの——だから——きっと大丈夫ですわ。ランシングさん、あなたをフォーゲルシュタイン伯爵に紹介させてください」そして彼女は、この船客仲間に麦藁帽子と飾りピンの男性を紹介した。男は、まだ一度も会ったことがないかのようにフォーゲルシュタインと握手した。フォーゲルシュタインは驚いて、一瞬、心臓が喉までとび上がってきたように感じた。パンドーラもしばしば口にし、彼女の身内の一人がパンドーラの恋人だとも言った紳士、その紳士の友人にチップを差し出すことをしなかったという自分の幸運に感謝した。

「こんどは、ご婦人がたのお相手です」とランシング氏は微笑をうかべて彼に言った。このことの意味の確認をその微笑は、そっと密かに示しているようであった。まるで、どちらもそんな確認をしたがっていることはあり得ないとでもいうふうに密かに。

「ねえ、ベラミーさんは、ベラミーさんのためならあなたは何でもして下さるっていったるわよ」とパンドーラはランシング氏にとても優しく微笑み

かけた。「あたし達、大して持ってませんわ。2年しか行ってませんでしたもの」

ランシング氏は頭の少し後ろのあたりを掻いた。その行為で麦藁帽子が鼻のほうへずれた。「あなたの為にぼくがしてあげないようなことを彼の為にするなんてことは考えられませんね」と、同様の愛想のよさで彼は答えた。「あれを開けたほうがいいですよ」——彼は、トランクの一つを軽くやさしく蹴った。

「まあ、この方、何て可愛いんでしょうねえ、母さん。これは、あなたが海で使うものばかりだわ」とパンドーラは大声で言い、鍵を手にしてそのトランクの上にしゃがんだ。

「あたしゃあ、見せたいとはおもわないよ」とデイ夫人が控え目に呟いた。フォーゲルシュタインは、そこにいる人達にドイツ式挨拶をおくった。パンドーラに対しては、声に出してさよならを告げた。彼女は、親しみのこもった明るい声で挨拶を返した。が、もたもたした手つきでトランクの錠を開けようとしていたところなので振り返りはしなかった。

「ご希望なら、別のを見ましょう」とランシング氏が気さくに言った。

「あら、とんでもないわ。これでなくちゃいけないのです！ さようなら、フォーゲルシュタイン伯爵。わたし達を正當に評価なさいますように！」

青年は自分の行くべき方へあるいていき、ドックの柵を通過した。

そこで彼はイギリス人の従者に迎えられた。相手の顔が驚愕をあらわしていたので、辻馬車の用意はまだなのか、と尋いた。

「こっちじゃ、貸し馬車っていってるんです」と相手はいった。「それがまた法外なんですよ。お宿までで30シリングとるっていうんです」

フォーゲルシュタインは、ちょっと躊躇した。「ドイツ人の御者は見つけれられないのかね？」

「話し方でわかるんですが、そいつはドイツ人なんです！」と従者は答えた。ただちに、オットー伯爵は、祖国の言葉で貸し馬車の料金について交渉するということでアメリカでの活動を開始した。

II

彼は、求められれば何処へでも出掛けていくことにしていた。アメリカの社会を研究するためと、ワシントンには気晴らしというものがあまりないようなのでそんな機会をみすみす見逃すわけにはいかなかったからである。2回目の冬が終る頃には、当然のことながら、彼は既にあれこれと多くの経験をしており——アメリカ社会についての彼の研究はかなりの成果をあげていた。しかしながら、2年めの4月に、ボニーカーズ夫人主催の大パーティーに彼が出席したときには、彼が（他の場合よりも遥かに生き生きとして話好きそうにみえて）そこに姿を現わしているのは、上記の方針に依るものではなかった。これは社交界シーズンの最後を飾る重要な行事だと考えられていたのだが、彼女のパーティーに出掛けたのは、それは、彼がボニーカーズ夫人が好きだったという単純な理由からだった。そして、彼女のレセプションは、ワシントンでいちばん楽しいものだった。また、ここへ来なかった場合は、彼はほかに何を為すべきかがわからないから、という事情もあった。尤も、ポトマック河の辺りの生活で、他にとって代わる選択がないということには慣れっこになっていたのだが。或ることをしなかったら他に為すべきことが判らないからという理由で彼が行なったものの数は多いのである。しかし、ここで付け加えておかねばならないのは、ボニーカーズ夫人のパーティーに関しては、もし別の選択があったとしても、彼は、やはり、こちらに参加することに決めただろうということである。もし夫人の家が最高に楽しいものではないというのであれば、では、どの家がそれよりももっと楽しいといえるだろうか。それは、どうみても、むつかしいことだ。彼女の家についてときどき口にされる不満は、それがあまりにも制限され過ぎていて、概して、受け入れるよりもっと多くの人を締め出してしまうということだった。が、それが一般的なパーティーのために解放されたとき、その不満はあまり当て嵌まらなくなった。大気が南国風の光を帯びはじめて、四角広場と円形広場（人影のない大通りが幾つか、とても工夫に富んでいると同時にとて

も困惑させる計画にしたがって、これらの広場へ向かって集まってくるように造られていたのだが) が淡紅色の花で輝きはじめると、人はベンチに腰をおろしたくなった。ワシントンの春のこんなふうな、穏やかで爽やかな芳しい日々の中に社交界の季節が終わろうとしているその頃に——この膨張と宥恕の魔法にかかって、ポニーカーズル夫人は、冬の間は非常に防御的だったのに、警戒をすこしゆるめて、気まぐれに計画し、いわば青春のように向こう見ずになったのだ。古い新聞の綴じ込みばかりか朝刊にでも参照すればそれが誤りだということが簡単に明らかにできるかもしれないようなそんな歓待というものが如何なる結果をもたらすかということ、について推し測るということをしなくなったのである。だが、オットー伯爵の見解では、ワシントンの生活は誤りでおおわれていた。彼は、根本的な虚偽と勝ち誇った大失敗というものの上に築かれている社会に自分は身を置いていると感じていたのだ。実在を茶化すような考えに耽るということは殆どなかったが、彼は、ここに滞在するようになって間もなくの頃、この偉大な共和国を楽しむ唯一の方法は、自分の基準を焼いてしまいその炎で自己を温めるということだろう、と思った。これが、今や己れの偏見の遺灰の中を歩くのが日常となった思索的チュートン人の感想であった。ポニーカーズル夫人は、受け入れるべき人と無視すべき人を決める基準を、彼に一度ならず説明しようとしたものだった。が、彼にとっては、この女性の差別待遇を理解するのは、なかなか大変なことだった。アメリカのごたまぜ状態は彼にとっては奇妙なものであったが、アメリカ流批評の奇妙さに比べればそれはものの数ではなかったのだ。夫人は^{ア・ベルト・ド・グユ}目の届くかぎり、彼が類似しか見ることのできないところにある相違やワシントンの社交界の数多くのメンバーの長所と短所の両方についてよく話してくれたものだった。彼のほうは、しばしば、理解することができなかったのだが。さいわい、この女性には、あふれてくるようなご機嫌な気分があり、既にお分かりのように、その上機嫌が4月の花盛りの頃に最高潮になりがちで、そうなると、自分の家に招かなかったひと達も招いたひと達と殆ど同じくらいに愉快的連中であるように彼女には思われてくるのだった。良人

は、政見は豊かだったが、政治とは関わっていなかった。が、夫妻は、愛国主義を實際に行動で表わすという責務を引き受けていた。ふたりは、アメリカで生活するのが正しいことだと考えている。この点に於て、それを、いくらか憂鬱な気持で、避けられないこととして考えているだけの多くの知人たちとは異なっていた。ふたりは、多くのアメリカ人たちが背負わされている外国の記憶というあの厄介な遺産は所有している。しかし、それを、殆どの同国人たちよりも気軽に携えている。彼ら夫妻がヨーロッパに住んだことがあるということは、それと比較して現在のアメリカでの生活をとても喜んでいるというところから判るのであって、万が一にも、今を悔やんでいるからというのではなかったのだ。これは、夫人が、さる外国公使の夫人に話したことがあるのだが、つまり、後悔することがあるなら、それは自分たちがヨーロッパに住んだということに対してだけだった。夫妻は、総ての問題をうまく解決した。それらの問題は、自分たちが望まない者とは誰とも知り合いになっていないということや、秘密の悪徳を口にするときにつき纏ったかも知れないような願望と非難の入り交じった気持で人が、有閑階級という名のもとに、繰り返しくりかえし話題にするのをフォーゲルシュタインが耳にすることになったあの階層のひと達のための暇つぶしの手段が乏しいと思われている社会に於て、その手段を沢山見付けるということを含んでいたのである。暖かい天気が近づいてきて、夫妻が両開き扉の両方をいっぱい開いたのは、それが自分たちを楽しくしてくれると考えたからであって、世間の圧力を意識したからではなかった。アルフレッド・ボニカースルは、冬の間中、妻の明確な制限の処置に、いささか苛立っていた。つまり、夫妻の社交世界がワシントンにしてはちょっと高尚すぎる、という印象を受けていたのだ。フォーゲルシュタインは、あの困惑した気持をまだ覚えていた——尤も、今はいくらかおさまっているのだが——その気持というのは、1年と少し前、ボニカースル氏が、自分の家でディナーを済ませたあと、その時はドイツ書記官である彼（彼は晩くまで残って夫妻とひとときを共に過ごすことがしばしばあった）以外の客は皆帰ったあとだったのだが、次のように言うのを耳

にしたときの気持である。「おや、もうあと1か月しかない。ぼくたちも通俗的になって楽しいことをやろう——大統領を招待しよう」

これは、ボニカースル夫人の祝祭だった。わたしは、その機会について言及することによってこの章を語りはじめたのだが、大統領はこれに招待されていたばかりか、出席するという意思表示を伝えてきていたのだった。急いで付け加えておかなければならないが、これは、アルフレッド・ボニカースルが不敬な言及をした、あの威厳ある統治者そのひとではなかった。ホワイト・ハウスは新しい居住者を迎え入れていたのである——前任者は今そこを去るところだった——オットー伯爵は、アメリカ滞在の18か月の間に、選挙のキャンペーン、大統領就任式、報償としての役職の分配といったものを目の当たりにするチャンスに恵まれたわけだ。はじめの数週間は、首府に於て、自分が最良と考えている家々で国家元首が切望される客人ではないということを知って、彼は困惑していたのだった。というのは、そうでなければ、いわばお遊びとして大統領を招待しようなどというボニカースル氏の気まぐれな発言についての説明がつかないからである。新任者は、大統領にしてはよく出掛けた。

立法府の会期は終わっていた。が、そのことが、ボニカースル夫人の部屋部屋の様相にこれといった変化をもたらすということにはならなかった。そこは、議会の最盛期でさえ、議員たちがあふれるということではなかったのだから。そこでは、ときどき来る上院議員が飾りとなり、彼の言動は、しばしば、不安と寛容の入り交じった気持で見守られていた。あたかも、彼の言動は、もし風変わりなものでなかったら失望させるだろうけれど、注意深く見守っていなかったらやはり危険だろう、という具合である。これらの立法府議員に対してオットー青年は好意を抱くようになっていた。彼らの会話にはだぶだぶの襷があって本音を包み込んで隠してしまうトーガ衣のようなところがあった。が、その他の点では、むしろ、ありのままで飾り気がなかった。古代の立法者たちの胸像や立像のように顔に石質の皺が刻まれていた。彼らの高貴であると同時に剥き出しでもあるというところに、形式ばかりながら曝

されてもいるようなものを、オットー青年は感じた。彼らの目には、しばしば、孤独な目差しがあらわれた。あたかも、彼らの立法府意識が、社交界の中で、2、3の出来あいの心安まるような法律の温かさを求めているかのようであった。国会議員は、ひじょうに希であり、ワシントンに来てまだ日の浅い頃には、ホールや階段で彼らに出会ったとき、この好奇心旺盛な書記官は、彼らを、必要があって、賓客の案内をしたり、サパーの給仕をする職務の担当者だろうと、よく勘違いしたものである。この公人たちには、殆どいつもつよい感銘をあたえるところがあり、おのずから定服として役立つあの豊かな民族的特色があるのを彼が読み取ったのは、それから間もなくのことであった。しかし、まごつかせるところのあるこのような人物たちを目にすることは、今は、冬の間と比べるとずっと少なかった。確かに、ボニイカーズル夫人の邸に彼らが姿をみせるのは決してたびたびというわけではないのだった。今、ワシントン社会の展望は、政治的現象が欠乏していることを暗示していた。それは、この季節にはこれまでになく広々として漠然としたものにフォーゲルシュタインにはおもえる、あの、文字や番号の付いた、広くて新しくて平らかな街路のようであった。その晩は、オットー伯爵は、皆を、または、殆ど皆、を知っていた。そこには、ニューヨークやボストンから、詮索好きで大きなことを期待している余所者がくることが多かったが、このドイツ青年は、友好的なワシントン式のやり方で、直ちにその人たちに紹介されたのだ。そこは、誰もが互いに親密になっている社会であり、人は日に3度会うということにもなりがちである。だから、人びとの究極の性質がほんとうに重要な問題となるのだった。「はじめての若い娘さんが3人来てますのよ」とボニイカーズル夫人が言った。「あなたは3人ぜんぶとお話ししなくちゃならないのです」

「1度に、ですか？」とフォーゲルシュタインは訊いた。彼は、自分が決してまったく知らないというわけではないその立場について、頭のなかであれこれ考えていた。1度に4人以上から話しかけられるということ、それまでに何度も経験していたのだ。

「とんでもありませんわ。1人ひとりそれぞれに違ったものを用意なさらずなくちゃなりません。そんな風じゃ、親しくなれませんのよ。あなたは、アメリカの若い女性は、当人だけにかぎって特別にいてもらえることを期待するってことに、まだ気付いてらっしゃらなかったのですか？ ヨーロッパでは、どの女性にも役立ついくつかの言葉を用意しておくだけで充分です。ところが、アメリカの若い娘は、自分以外の如何なる女性でもないのです。自分は、或るひとつの素晴らしい種の或るひとつの素晴らしい代表的見本なのです。でも、今夜は、あなたは、デイ嬢のために最上のものをとっておかなくてはなりませんよ」

「デイ嬢ですって！」—— フォーゲルシュタインは、目を見張った。「パンドーラのために、という意味ですか？」

ボニカースル夫人のほうは、手放しで面白がることになった。「あの娘さんを探して世界中を駆け巡ってきた、とおもわれますよ！ じゃあ、あの娘さんを既に知ってたのね—— それで愛称で呼ぶんでしょう？」

「とんでもない。知ってるわけではないのです。あの日から今まで、会ったことも、考えたこともありません。ぼく達、おなじ船でアメリカへ来たのです」

「それでは、その方、アメリカ人ではないのね？」

「とんでもありません。彼女は、奥地—— ユーチカに住んでいます」

「ユーチカなんて奥地に？ それでは、あの娘さんではあり得ませんわ。だって、彼女は、ニューヨークに住んでて、すごい美女、いちばんの花形で、この冬、とっても賞賛をあつめてるんですもの」

「けっきょくは、」とオットー伯爵は、考えをめぐらせ、やや失望して言った。「そんなに珍しい名前ではありませんし、たぶん、別人なんでしょう。でも、その方の目は、すこし黄色がかっているけれどもとっても綺麗で、どちらかといえば風変わりな目なのですか？ 鼻が、いささか弓形で？」

「そこまでは判りませんわ。会ったことはありませんもの。スツーベン夫人のところに滞在していますのよ。1日か2日前に着いたばかりなんです。それ

で、スーベン夫人が連れてくることになっておりますの。彼女が手紙で許可をもとめてきたとき、いま話したようなことが記してあったのです。ふたりは、まだ来てませんわ」

手紙に記されていたという娘さんは、ほんとうに、ニューヨークの波止場で別れたあの若い女性かもしれない、という性急な望みをフォーゲルシュタインは抱いた。しかし、別方向を示している幾つかの証拠があるようであり、幻想は抱きたくなかった。彼をランシング氏に紹介した、あのエネルギッシュな若い女性が、ワシントンで最高のこの邸に入る手立てをもつということは、ありそうになかった。それに、ボニカースル夫人のその客人は美人であって、あの輝かしい都市に住んでいるというではないか。

「スーベン夫人の社会的地位は何なんですか？」あれこれ考えているうちに、彼は、こんなことを訊くことになった。それに、生真面目な、芸のない、融通の利かない質問の仕方だった。彼がすごく几帳面だということが判る。

しかしながら、ボニカースル夫人は、ただ、からかうように笑い声をあげた。「知るもんですか！ あなた自身のは何なのかしら？」——彼女は、彼の側を離れて他の客人たちのほうへ行った。そして、何人かのひとに彼の質問を繰り返した。スーベン夫人の社会的地位が何なのか教えていただけますかしら？ フォーゲルシュタイン伯爵ってかたが知りたがっておりますのよ、と。彼は、いうまでもなく、あんな風に自分の気持を表わすべきではなかったということに、すぐ気付いた。その夫人の階級は、ボニカースル夫人が知り合いだということで十分に示されているのではないだろうか。それでも、やはり、そこには微妙な差があるのだ。彼は、いささか不当にあしらわれたと感じた。女主人に話したとおり、アメリカに到着してから急速にどっと押し寄せてきた新しい印象の波によってパンドーラのイメージは殆ど完全に消し去られていたということは本当だった。彼は、あのドナウ号のヒロインと同じくらいにそれなりに注目に価する夥しい数のものを見てきたのだ。だが、彼女に今にも会うことができその声を聞けるかもしれないとい

う考えに触れただけで、パンドーラが、まるで昨日別れたばかりであるかのように心の中で生き生きとしてきた。ボニカースル夫人には黄色だったと描写してみせた彼女の目の正確な色合いとか、別れ際にアメリカを正しく判断してほしいと彼に言ったときの彼女の声の調子を、彼は思い出した。ところで、彼はアメリカを正当に判断しただろうか？ 再会することになったら、彼女はそれを確かめようとするにちがいない。そのような試練を考えると彼は恐ろしくなったなどといえば、あまりにも言い過ぎということになるだろう。が、少なくとも、パンドーラ・デイに会うことをおもうと落ち着きを失ったとはいえよう。この事実は確かに奇妙なものだ。しかし、これを説明することを、わたしは引き受けようとはおもわない。最も哲学的な歴史家でさえ説明することを義務づけられないものがあるではないか。

彼は別の部屋へぶらぶらと歩いていった。そこで5分ほど過ごしたとき、ボニカースル夫人が、先刻話題にした淑女のひとりに彼を紹介した。この淑女は、ボストン出身の、すごく知的な女性で、シュピルハーゲンの小説をよく知っているようだった。「彼の作品がお好きですか？」フォーゲルシュタインは、小説は船旅のときにだけ読む程度だったからそのことには大して興味をおぼえることもなく、漠然とした訊き方をした。ボストンの淑女は、考え深そうな様子でじっとおもいを凝らした。それから、とても気に入っている作品が幾つかあるが、好きでないものもある、と答えた——そして、好き嫌いの項目別に作品を数えあげた。シュピルハーゲンは多作な作家だった。だから、そのような目録をつくるのには、ちょっと時間がかかった。それに、それが終わっても彼の質問は答えを得たことにはならなかった。というのは、この女性がシュピルハーゲンを好きなのかどうなのかということが、どうも判然としなかったからである。

けれども、次のトピックに関しては、彼女の気持は疑う余地はなかった。ふたりは、ワシントンについて、ひとがその土地に身を置いているときのみ話すやり方で語りあった。つまり、範囲を広げたり狭めたりしながらその主題をめぐる、次々と多くの関連事項について語り、その主題をあらゆる観

点から考えた。オットー青年は、アメリカ滞在ももう随分長かったから、ワシントンというものが半世紀ほどなおざりにされたあとで流行となり、会話に新しい話題を供給するという恵まれた立場になっている、ということを知っていた。このことは、春季において特にいえることだった。この季節には、商業都市の人びとが、長い冬のあとのあの最後の寒波の襲来を逃れてここまで南下してくるのだった。彼らは皆、ワシントンは素晴らしいということで意見が一致した。そして、このことについて語るのに、ボストンのひと達ほどに用意のよくできている者は誰ひとりとしていなかった。フォーゲルシュタインは、もともとは、どちらかといえば彼らとは調子が合わなかった。彼らの見解が掴めなかったし、心酔の対象を何と比べているのかが判らなかったのだ。しかし、今の彼は、総てのことを知っていた。そして、彼らの調子と合うようになっていたのだった。もう、論議の如何なる側面も彼を当惑させるということはできなかつた。そこには、ヘーゲル的要素のようなものがあつた。これらの意見に照らせば、このアメリカの首府は、怪物的で神秘的な際限のない^{ヴェルダン}生成の様相を帯びた。だが、これらの意見は、フォーゲルシュタインをいささか疲れさせた。一般的には、一夕に相手をする新参者、つまり新たに招待されてきている訪問客は、ひとりだけに限るとするのが彼の好みである。だから、ポニーカーズル夫人が3人の若い淑女に彼を紹介したいと言ったとき、ちょっと驚いたのだ。その処理が自分はいまうまくなつたと自惚れてはいるものの、結局は、かなり気骨の折れる過程を、淑女たちそれぞれに繰り返すことになるだろう、ということが予測できたのである。利口なボストンの淑女と別れたあと、彼はポニーカーズル夫人を避けるようにした。気心の知れた友人たちの、レヴェルを低くした気楽な調子の会話で満足した。

とうとう彼は、大統領が既に来ており、到着してからもう30分ほど経っているということを耳にして、この著名な賓客を探した。この大統領の場合は、ワシントンのパーティーで、取り巻き連中が目じるしとなってその所在の見当がつくなどということはないのである。大統領の前に出たときには如何なる場合であっても敬意を払うということにしていたから、偉大な人物が大統領

らしく手を差し出して、「会えて嬉しいですよ」と言いながらもその目の中には何らの関連連合のしるしも現われなかったという事実があっても、彼は、気持ちをくじかれるということは全くなかった。オットー伯爵は、一介の忠節な国民、たぶん、官職にありつきたがっている輩とも、取り違えられたと感じた。彼は、こういうときには、君主制の形態というものはそれなりの利点があるものだと考えるのが常であった。それは、直ちに身分を判らせる代々の遺伝形質というものを与えてくれるからである。彼は、今、大統領を見付けるのに手間取っていた。そして、遂に、喫茶室にいるということを知ることができた。それは、ちょっとした休養をとるのに用いられる、玄関近くの小さな部屋であった。ここで、オットー青年は、すぐに、大統領がソファに腰をおろしてひとりの淑女と話しているのを目にした。テーブルのあたりでは、数人のひとが食べ、飲み、しゃべっていた。ソファは、テーブルから離れたところに壁に沿って据えられていた。そこは、僅かにへこんだ領域でもあり、ソファのふたりは、まるで人目を忍ぶ場所を求め、他のひと達が別のことに気をとられていることで利を得ようとしているかのようであった。大統領は、身をそらしていた。手袋をはめた両手が、両膝のうえに白い大きな斑点に見えた。高い身分をおもわせたが、リラックスした様子だった。傍らの淑女が、臆することなく、のびのびとした態度で、大統領を心地よくくつろがせているのは明らかだった。ふたりの方へ近づいていくと、その女性の声が聞こえた。「じゃあ、お忘れにならないでね。このことは、お約束してくださったものとおもってますから」彼女は、薔薇色の服を見事に着こなしていた。掌を膝のうえで握りしめ、目を大統領の横顔に釘付けにしている。

「いやあ、お嬢さん、わたしは、今日、これで50ぐらい約束したことになりますよ」

淑女の相手がこんなことを口にしてるのが耳に届いた。オットー伯爵は、踵を返して、一杯の紅茶を求めている振りをした。たとえ単に握手をするためだけであったとしても、ソファに淑女と腰をおろしている大統領の邪魔をする

のは、非常識なことであった。まして、この場合は特に、そのルールを破るということは考えられないことだ、とこの若い書記官はおもった。というのは、ソファの淑女こそはパンドーラ・デイそのひとに他ならなかったからである。こちらは彼女に見られていないようだが、彼は、この女性がパンドーラであることを確認していたのだ。そして、よくいわれるように、一目で、彼女が重きをなす人物になっているのが判った。意気揚々として、成功の香りを放っている。薔薇色の服を纏って、眩しいばかりに輝いている。そして、5千万人の国民の統治者から約束を引き出していたのだ。それにしても、この女性と巡り合うにしてみれば、これは何と奇妙な場所だろうというのが、この元船客仲間のおもいであった。結局のところ、アメリカでは、誰が何者であるかを見分けるのは何とむつかしいことか！ 彼は、まだ話し掛けたくはなかった。もう少し待って、もっと事情をよく知りたかった。が、その一方では、彼女が僅か2、3ヤード後ろにいて、振り向けばまた目にすることができるといふ事実には魅力的な何かがあった。ボニーカーズル夫人が話していた人物とは、ニューヨークで賞賛をあつめている人物とは、この女性に他ならなかったのだ。同じ顔だった。とはいうものの、なんとなく奇麗になっているのが一目で判ったのだ。ぐいっと弓形にまがった鼻の線を彼は確認していたが、それは、ひたむきな野心を暗示している。そこに留まるために、彼は、欲しくもない紅茶を飲んだ。船上で彼女がひき連れていたお供の^{アソ}一行^{ラージ}を思い出した。それは、〈世間〉と付き合おうとしない、無口で愚かな小市民の父と母であり、世間好きで人見知りをしない幼い妹であり、高い帽子をかむって喫煙室で影響力を示していたユーモアのある弟であった。彼は、デインジャーフィールド夫人の警告を思い出した——同時に、夫人の困惑も——ベラミー氏からの手紙、ランシング氏に紹介されたこと、その場の情況に君臨して笑ったりしゃべったりしながらパンドーラが汚れた埠頭で税関手続きのためにトランクを開けようとして屈み込んだ様子などを思い出した。きっと、あの日、彼女は関税を払わずにすましたにちがいない。いうまでもなく、それが、ベラミー氏の手紙の目的だっただろう。彼女は、まだ彼

と文通しているのだろうか。あの時のふたりの再会をはばんだ病気は治ったのだろうか。このようなイメージと問いが、オットー伯爵の心の中を駆け巡った。状況の支配者になるということはパンドーラがほんとうに得意とするところであるにちがいない、と彼はおもった。というのは、明らかに、さしあたって彼女の主人であるといい得るものは無かったからである。彼は、紅茶を飲んだ。コップを置いているとき、背後で大統領が言っているのが聞こえた。「さて、このままここに居ては、妻が、わたしが何故帰ってこないだろうって心配することでしょう」

「どうして奥さまを連れていらっしゃらなかったのですか？」とパンドーラが優しく訊いた。

「妻は、あまり外出しないのです。それに、ナッチェズから妹がきて滞在してましてね——ランクル夫人というのですが。この妹はとてもからだの具合がわるいので、妻は、ひとりにしておきたがらないのですよ」

「きっと、とてもお優しいかたなのね」——高度に成熟した巧みさがその肯定的な言い方に窺えた。

「そうねえ、まだ——甘やかされて駄目になるということにはなってないでしょう」

「ぜひ、奥さまをお訪ねしたいものですわ」

「ぜひ、いらっしゃい。できれば、いつか、夜にでもね？」と偉大な人物は応じた。

「ええ、いつか伺わせていただきますわ。そうして、あなたさまに、あのお約束をおもい出させましてよ」

「いいですとも。繰り返すことに勝るものはないですからね。では、」と大統領は言った。「わたしは、この素晴らしい仲間たちにもういとまをいわなければなりません」

大統領が相手と一緒にソファから立ちあがる音がした。フォーゲルシュタインは、ふたりに自分よりも先に部屋から出ていく時間を与えた。ふたりは、堂々とした落ち着いた態度で出ていった。人びとは、この5千万人の統

治者のために道をあけた。彼の傍らに添うている鮮やかなピンクの服を着た人物に好奇の視線を注いだ。すこしあとで、オットー青年がホールを横切ってふたりのあとを追い、他の部屋のひとつに入っていったとき、彼は、この邸の夫妻が大統領を扉まで送っていき、2人の外国公使と最高裁判事がパンドーラ・デイに話し掛けるのを目撃した。彼は、このひと達の輪の中に加わりたいたいという衝動に耐えた。いやしくも自分がこの女性に話し掛けるのであれば、それは、もっと個人的な状況でありたかったのである。だが、彼女は彼の意識からいつまでも離れなかった。ボニイカーズ夫人がホールから引き返してくると、彼は直ちに傍へ行って訴えかけた。「あの若い女性についてもっと何か教えてほしいものです——あの、向こう側の、ピンクの服のひとのことです」

「かわいいデイさんのことかしら？——皆さん、そう呼んでるのですが。ご自分でお話しになるといいですわ」

「あのひとは、ぼくが会ったことがあるっていった例の娘さんなんです。でも、ここでは、とても違って見えるのです。理解できません」とオットー伯爵は言った。

ボニイカーズ夫人を再び面白がらせる何かが、その表現の仕方にはあった。「あたし達は、あなた達ヨーロッパの方たちを何て困らせてしまうんでしょう！ほんとに困惑してらっしゃるご様子ね」

「顔に出て、残念です——隠しておきたいのですが。でも、もちろん、ぼくたちはとても単純です。そこで、単純で真面目で子供っぽい質問をさせて下さい。あの女性のご両親も社交界のメンバーなのですか？」

「両親が社交界のメンバーか、ですって？ 貴方様は何処から墜ちてらしたの？ いったい貴方は、そんなこと聞いたことありますか？ 鼻が独特で、勝ち誇った様子の、あの薔薇色の服の娘さんの両親が社交界のひとだなんて」

「じゃあ、彼女は、まったくのひとりなんですか？」とつづけた彼の声は、どこか憂鬱そうだった。

ボニイカーズ夫人は、ありったけの笑い声を彼に浴びせかけた。

「貴方は、感傷過多ですわ。あの娘さんが何者かを知らないのですか？
わたくしは、もちろん、ご存知だとばかりおもっておりました」

「そのことこそ、ぼくがお訊きしていることですよ」

「あら、あれはニュー・タイプですよ。さいきん登場したばかりなんです。これまでに何度も新聞に記事が載りましたわ。だから、わたくし、スーベン夫人に彼女を連れてくるようにいったのです」

「ニュー・タイプ？ どんなニュー・タイプなんですか、ボニーカースル夫人？」と彼は懇願するように問い返した——彼は、アメリカのタイプはどれも新しいという気持ちがとてもつよかったのだ。

夫人のほうは笑いを抑えきれなくて、ちょっとの間、答えることができなかった。彼女が自分を取り戻したときには、彼が言葉を交わしたあのボストンの若い女性が、別れをいうために側にきて立っていた。この女性はアメリカのものとしては古いタイプだ、と彼は確信した。この客人と女主人との間に交わされた挨拶の仕方は時代がかって念の入ったものだった。オットー伯爵は、すこし待った。それから、踵をかえして、パンドーラ・デイのところへ歩いていった。彼女と談笑しているひと達の集まりは、かつて前大統領の内閣で重要な地位を占めていた紳士が加わったことで更に華やかになっていた。オットー伯爵は先刻ボニーカースル夫人に、「彼女は、まったくのひとりなんですか」と訊いたのだが、今ここには彼女の孤独を示すものは何もなかった。そして、彼女は、彼の希望にかなうように他のひと達からひとり離れているという状態ではなかった。それでも、彼は待ち切れなくて、この女性から2、3の言葉をかけてもらいたいと願った。彼女は、微塵のためらいもなく、このうえなく優しい微笑をうかべて、彼を認めてくれた。彼女が「ずっと貴方から目を離さずにいましたのよ。あたしには話し掛けないおつもりなのかしら、とおもっておりましたわ」と言ったとき、その声の調子にこの微笑がまさにぴったりと釣り合っていた。

「デイ嬢はこの紳士から目を離さなかったんだって！」と外国公使のひとりが感情をこめて言った。「われわれは、おめでたくも、全面的に注意をこ

ちらに向けてもらえてるとばかり思い込んでたんだ」

「前に、という意味なの」と彼女は言った。「あたしが大統領閣下と話してたときのことよ」

紳士たちは、これで笑いはじめた。この場に居ない者は、偉い人でさえ、こんな風に犠牲にされるんだ、とひとりが言った。別のひとは、フォーゲルシュタインはこれほどの好意を受けるのにほんとうに相応しい人物だろうね、そう望むよ、とあけすけに言った。

「あら、あたし、大統領閣下からも目を離しませんでしたわ」とパンドーラは言った。「あの方に注意を向けないわけにはいきませんもの。あの方は、或る事を、あたしに約束してくれましたの」

「それは、きっとイギリスへの派遣だ」と最高裁判事が言った。「あれは、ご婦人のためによいポストです。あの国では、最高の地位にご婦人を載っているのですからね」

「あなたがぼくの国へ派遣されることになったらいいですのにねえ」と外国公使のひとりが言った。「そうなれば、ぼくは、直ちに本国へ呼び戻してもらいます」

「あら、貴方のお国では、あたしは、たぶん、貴方に話し掛けたりはしませんわ！ こうして言葉を交わしているのは、こちらにおられるからにすぎませんのよ」とドナウ号の元ヒロインは、陽気に無遠慮に言い返した。明らかに、これは、ひとえに護身の技術としてというのなら、この女性にふさわしかった。「任命の内容は、公表されたときに判るでしょう。でも、あたし、フォーゲルシュタイン伯爵になら、どこであろうと、言葉を掛けますわ」彼女は更につづけた。「この方は、ここにおられるどなたよりも古くからのお友だちですもの。辛い時期に知り合ったの」

「ええ、そうなんです。大海のうえでした」青年は、微笑んだ。「暴風雨の大海原で！」

「まあ、あたしは、それほどにあの事を申してるのではありませんわ。あれは、すばらしい旅行で、嵐なんてありませんでしたもの。あたしが言っ

てるのは、ユーチカに住んでたときになってことなんです。あそこなら、茫漠たる大海原ともいえますし、あそこに嵐でもあってくれたら、それは楽しい変化になったでしょうよ」

「ご両親は、なんともおとなしい方の方でした！」別の記憶をたどっていた彼は、漠然と、何か同情的なことを言いたくなって溜息をついた。

「あら、貴方は、陸上の父母を見たことがないんだわ！ ユーチカでは、とても生き生きしてましたのよ。でも、あそこは、もう、あたし達の生活の根城ではなくなってます。あたしがニューヨークへ出るために努力してるって話したの、覚えてらっしゃらないかしら？ ええ、努力しましたとも——うんと努力しなければならなかったの。でも、ニューヨークへ移りましたわ」

オットー伯爵は、なおも自分の興味にこだわった。「あの方たちが幸せであってほしいものです」

「父と母のことですか？ ええ、そのうち、幸せになりますわ。時間の余裕をあげなくちゃね。まだ、若いんですよ。まだまだ、前途があるんですよ。貴方は、ずっとワシントンに？」パンドーラは、つづけた。「もう、あらゆる事についてあらゆる事をお知りになったでしょうね」

「とんでもない——どうしても判らないことが幾つもあります」

「あたしのところへいらっしゃいな。お力になれるかも知れませんわ。この点では、昔のあたしとは随分違ってましてよ。あの頃からうんと進歩しますからね」

「ほう、その頃のデイ嬢というのは、こういう点ではどうだったのです？」と前内閣の元閣僚が訊いた。

「もちろん、素晴らしかったですよ」とオットー伯爵は言った。

「この方、お世辞いってるのよ。あたし、口を開きませんでしたわ！」とパンドーラは、声を大きくした。「ほら、スツベン夫人よ。あたしを、どっか別のところへ連れていくことになってるの。たしか、議事堂近くの文芸のパーティだわ。ワシントンでは、すべてが、あまりにもばらばらなのね。スツベン夫人は、そこで詩を朗読なさるのよ。ここで読んで下さるといいん

「ただ。それでも、同じことだとおもいませんか？」

夫人は、やってくると、もうここはおいとましなければならぬ、と若い友人に告げた。が、デイ嬢の取り巻きたちは更にさまざまなことを言ったうえで、やっと彼女を放した。そのひとつひとつに対して生き生きとした応答を彼女は返した。フォーゲルシュタインは、それに耳を傾けた。そして、これは確かに、彼女のいう大いなる進歩の新しい局面である、と思い知らされた。彼女は、取るに足りない小市民の娘なのだが、ほんとに輝いていた。彼は、そこから少し身を離した。そして、待っているスツベン夫人に質問した。半時間前には、彼はこの夫人を彼の質問の対象にしていたのではなかったか。ボニカースル夫人があまりにも曖昧にしか答えてくれなかったあの質問の。しかし、それは、この愛すべき女性と彼がじかに知り合いになれなかったからだとか、この夫人が一般にどのような評価を受けているかを彼が知らなかったからだとか、というのではなかった。彼は、この女性とは色いろな場所で顔が合っていたし、彼女の邸に行ったこともあったのである。夫人は、提督の未亡人だった。知的に美しく、穏やかで優しく、ひとの心をうごかすところがあり、皆、彼女が好きだった。筋目のついた艶々とした黒髪、両耳のうしろにぶらさがっている小さな飾り輪。『ハムレット』の中の女王のヴィユ・ジュ旧式な考えを髣髴させるようだ、と夫人を評したひとがいた。彼女は詩を書いており、それは南部で賞賛されていた。提督の全身肖像画で胸を飾り、サヴァナ地方のアクセントで話した。彼女は、ワシントンの強烈な匂いを身のまわりにただよわせていた。フォーゲルシュタインが、ボニカースル夫人に、この婦人の社会的地位を尋いたということは確かに非常に不適切なことであった。

「どうか、ぜひ教えて下さい」と彼は声を低くして言った。「あの若い淑女が所属しているのは、どういうタイプなのですか？ ボニカースル夫人はニュー・タイプだっていっていますが」

スツベン夫人は、澄んだ目を、ちょっとの間、公使館付書記官に釘づけにしていた。彼女はいつも、ひとが口にする散文を、自分の心に親しい洗練

されたリズムに翻訳しているふうだった。それから、「何事にもせよ、ほんとうに新しいものがある、とお考えですか？」と彼女は、笛のような声で述べはじめた。「あたくしは、古いものがとても好きなのです。これは、あたくしたち南部人の弱点ですね」お気付きになることとおもうが、この同情すべき婦人には、もうひとつ別の弱点もあったのである。「われわれが何かを新しいものとおもうことはよくありますが、それは、ただ古いものが新しい形をとっているのにすぎないのです。過去の中に優れた特性があったのではないかしら？ もしこのことがお信じになれないのであれば、南部を訪ねてごらんになるべきですわ。あそこには、過ぎ去りし時間が、なお、たゆたっているのですから」

(つづく)

(1990. 4. 26 受理)